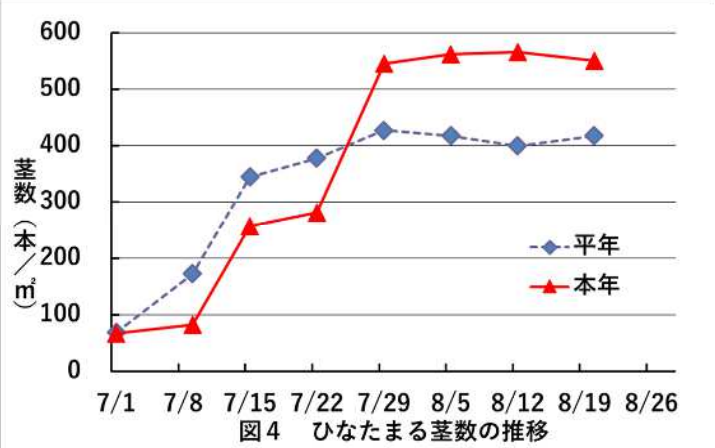
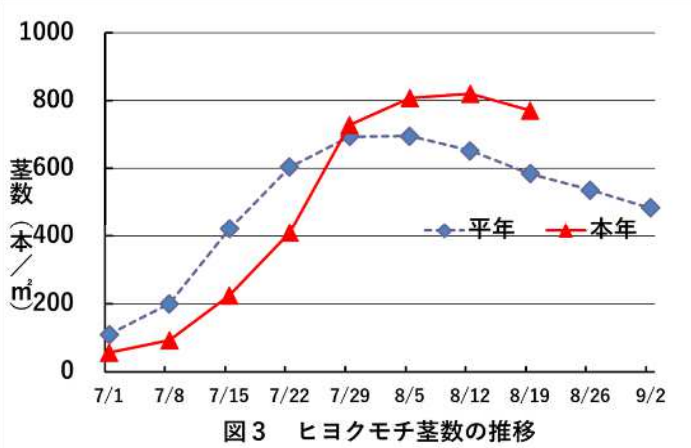
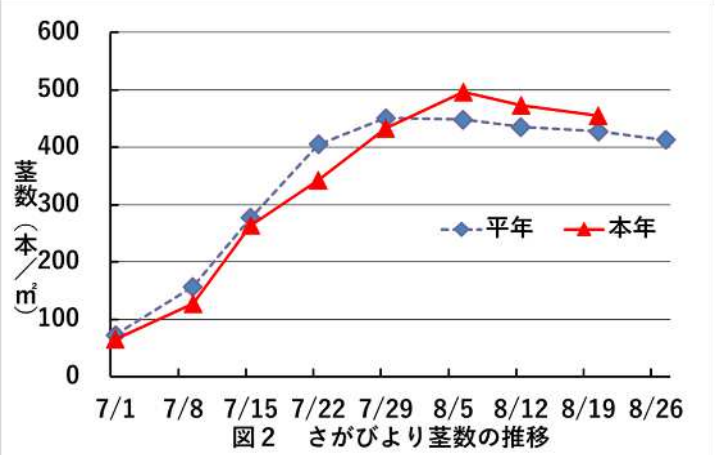
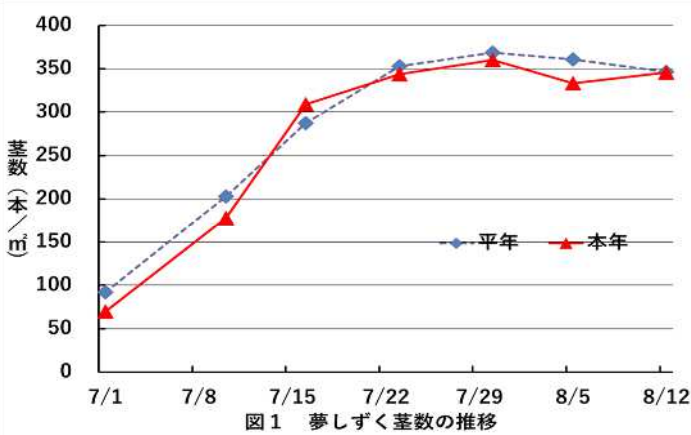


稲・大豆作情報（NO. 8）

1. 水稻作況情報田の生育概況（8月19日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/16 18.7株/㎡	本 年 平 年 平年比	出穂期（本年）8月16日 出穂期（平年）8月16日 平年並み				【気象】8/12～8/19まで 平均気温：平年並み 降水量：少ない(平年比0%) 日照時間：長い(平年比135%) ○草丈：「ヒヨクモチ」は平年 よりやや高く、「さがびより」 、「ひなたまる」は低い。 ○茎数：全ての品種において、 平年より多い。 ○葉齢「ヒヨクモチ」、「ひな たまる」はやや進んでいる。「 さがびより」はやや遅れている 。
さがびより 小城市芦刈町	6/20 19.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	78.0 87.3 (89)	456 428 (106)	13.8 14.4 (-0.6)	33.4 36.1 (-2.7)	
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/21 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	81.0 79.0 (103)	771 585 (132)	14.5 14.6 (-0.1)	41.0 37.2 (+3.8)	
ひなたまる 佐賀市大和町	6/20 15.4株/㎡	本 年 昨年 昨年比	83.7 89.7 (93)	550 418 (132)	13.9 14.4 (-0.5)	42.0 35.5 (+6.5)	

注1) 各品種 前作：麦 注2) 施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる
注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値
注4) ひなたまるはR7年から作付けのため、昨年との比較のみの記載になります。



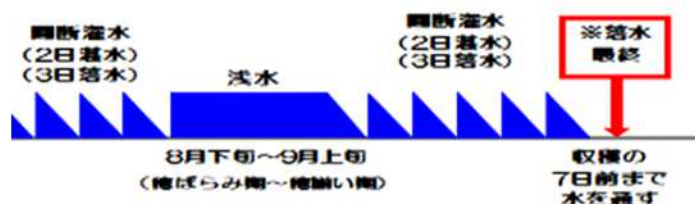
◆農業試験研究センター米づくり情報 8 号 8 月 20 日 (抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉齢 L	葉色 SPAD	概況 (平年または平均との比較)
6月18日	夢しずく	本年 平年 平年比(差)	出穂期: 8 月 15 日 8 月 17 日 (-2)				[気象] 8 月 13 日～8 月 19 日まで ◆平均気温…1.4℃高い ◆日照時間…長い(平年比 111%) ◆降水量…少ない(平年比 0%) [生育] ◆草丈 「ひなたまる」は低く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は平年並み、「ヒヨクモチ」はやや高い。 ◆茎数 「さがびより」は平年並み、「ヒノヒカリ」はやや多く、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」の主穂葉数(本年 13.1、平年 13.4)はやや少ない。 「ひなたまる」はやや少なく、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ヒノヒカリ」はやや多い。 ◆葉色(SPAD 値) 「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」はやや淡く、「さがびより」は平年並み、「ヒノヒカリ」は濃い。 ◆主茎の葉耳間長は「ヒノヒカリ」+6.4 cm(出穂予測 8 月 27 日頃)、「ひなたまる」+9.2 cm(出穂予測 8 月 26 日頃)となっている。
	ヒノヒカリ	本年 平年 平年比(差)	91.3 91.6 100	470 457 103	14.8 14.2 (+0.6)	37.2 33.8 (+3.4)	
	ひなたまる	本年 平均(2 年) 平均比(差)	84.8 93.2 91	443 400 111	14.6 15.0 (-0.4)	38.8 40.4 (-1.6)	
6月19日	さがびより	本年 平年 平年比(差)	86.8 85.7 101	458 458 100	14.4 14.4 (±0)	36.5 36.2 (+0.3)	◆主茎の葉耳間長は「ヒノヒカリ」+6.4 cm(出穂予測 8 月 27 日頃)、「ひなたまる」+9.2 cm(出穂予測 8 月 26 日頃)となっている。
	ヒヨクモチ	本年 平年 平年比(差)	77.6 75.2 103	768 556 138	14.8 14.7 (+0.1)	34.7 36.0 (-1.3)	

2. 水稻における今後の管理

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底

～



用水等から十分な引水が難しい圃場では・・・

- ① 少ない用水を効率的に利用するため、溝切を実施することが効果的
- ② 蒸発散量の少ない夕方から未明での灌水が、水稻の萎凋・枯死の被害を軽減できる。

「夢しずく」

・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、乳熟期～糊熟期、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、穂揃い期を迎えている。今後の水管理は根の活力維持及び地固めのため間断灌水に移行する。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は間もなく出穂期を迎え、「さがびより」は間もなく止葉が抽出し穂ばらみ期を迎える。「ヒヨクモチ」は、幼穂形成期を迎えている。
- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

○各品種における幼穂形成の状況（8/19時点）

品種・場所	移植日・播種日（直播）	生育状況
ひなたまる	6/20 移植	間もなく出穂
さがびより	6/20 移植	穂ばらみ期
	5/25 播種（乾田直播）	穂ばらみ期
ヒヨクモチ	6/20 移植	幼穂長 4 mm

注）振興センター展示ほにおける幼穂形成の状況を記載。

○高温干ばつ対策

今後も高温と少雨（干ばつ）傾向が続くと予想される。

出穂前後に高温が継続すると、

- ① 呼吸作用と茎葉からの蒸散作用の増加が起こる。
- ② 植物体内の同化養分量の減少により、えい花数の減少や小穂化が懸念される。

また、少雨により圃場の干ばつ状態が継続すると、

- ① 幼穂形成期から出穂開花頃までは、穂の短小化、えい花数の減少、不稔が起こる。

【高温対策】

- ① 高温条件下では、茎葉からの蒸散量が増加するので水分の補給は十分に行う。
- ② 高温・少雨条件が続けば根の機能低下が著しい⇒よりこまめな間断・灌水で根の機能維持に努める。
- ③ なるべく夕方冷たい水に入れ替え地温を下げるよう努める。特に、日中35℃、夜温が25℃を超えるような日が続く場合「掛け流し灌漑」が有効である。

【干ばつ対策】

- ① 幼穂形成期から出穂期が最も要水量が大きい時期であるため、幼穂形成期以降は間断灌水を行い、減数分裂期（出穂10日前）～穂揃期までは湛水を長めにするように心がける（この期間は最低でも黒乾状態とし、できれば湿潤とする）。
- ② 被害の目安としては、日中は若干萎凋していたとしても、朝夕は正常に戻っていれば被害は最小限に抑えることができる。穂ばらみ期に葉の先端の水孔からの排水が止まる（日暮れになっても先端に水滴がつかない）と白穂の危険性がある。
- ③ 幼穂形成期に白乾で経過し、穂ばらみ期に急激に灌水状態とすると、根の活力が失われるなどして、登熟不良になることが懸念される。したがって、最初は「はしり水」などして湿潤状態で経過させ、その後湛水するようにする。

○台風対策

- ・現在、トラック諸島近海で台風18号が発生し、日本の南を北上しています。8/下旬にかけて九州へ接近する可能性があるため、進路によっては水稻への影響が懸念されます。
- ・**台風接近時** → 風による稲体の損傷を少なくするため深水管理とする。
いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期にあたるので、必ず深水・湛水を行う。
- ・**台風通過後** → 茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2～3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
※台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

○施肥管理

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、間もなく2回目の穂肥時期を迎える。下記の穂肥施用基準を参考に施用する。
- ・穂肥施用時は湛水し、その後の間断灌水では、土壤中に酸素を送り、根の活力を向上するため落水期間を確実にとる。なお、田面が緩い場合、収穫と麦播種作業の効率化を図るため、落水期間をやや長めにとる。

表1. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計（SPAD）で40を切る場合、窒素成分で2kg/10a程度（BB602 15kg/10a）施用する。大豆跡では、上記の5割未満に減肥して施用する。

○病虫害情報（発生および防除）

- ・**今後も高温が続く見込みであり、高温・少雨の条件下では害虫の発生が多くなるため、発生状況を確認し適期防除を実施する。**
- ・セジロウンカとトビイロウンカは、6月3日頃～飛来しており、6月20日～7月6日、7月16～20日頃に主要な飛来が確認されている。（トビイロウンカ：7/1～7/6の飛来が約8割）

【トビイロウンカ】

トビイロウンカは、7月下旬調査において平年よりやや多い発生で、梅雨明け以降、気温が高く降雨日が少ないといった増殖に好適な条件で推移しており、「向こう1ヶ月の気温は高い」と予想されているため、今後も本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

- ・**防除については、現在1回目の防除適期（8/20～24）となっています。（次ページの発生予測の図1）**
- ・防除する場合は、湛水するとともに薬剤が株元まで十分にかかるように丁寧に散布する。

【有効薬剤：オーケストラ、エクシード、エミリア など】

【コブノメイガ】

- ・コブノメイガは6月20日頃および6月26日頃に飛来が確認されており、圃場によっては幼虫の食害が多い圃場も見受けられる。
- ・コブノメイガの発生予測は次ページのとおりで防除適期は幼虫ふ化揃い期(発蛾最盛期の7日後)である。今後、止葉を含む上位3葉に被害が発生すると減収につながるため、発生状況に注意する。

【有効薬剤：ロムダン、トレボンなど】(各自圃場の状況を見ながら防除をおこなう。)

- ・上記の両害虫とも、品種別に発生状況は異なると考えられるため発生状況を確認し、適期防除に努める。
- ・発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp



【ウンカ類・コブノメイガ】

トビイロウンカ防除適期
1回目 8/20～8/24
2回目 9/18～9/24

コブノメイガ防除適期
1回目 8/8～8/22
2回目 9/11～9/26

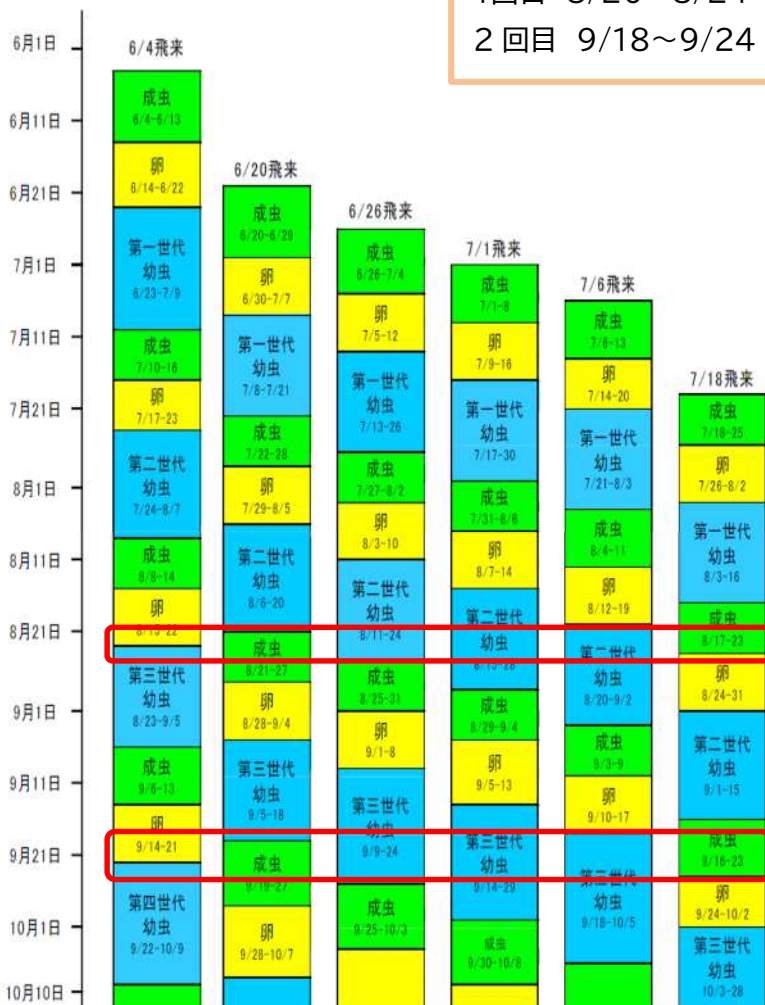


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測 (第2版、2026年7月26日作成)



図2 コブノメイガ各世代の発生予測 (第2版、2026年7月26日作成)

【斑点米カメムシ類】

・今年度は斑点米カメムシの発生が平年より多く、R8年7月 29 日付けて早植え及び普通期
水稻を対象

とした注意報が発令された。管内でも多発生圃場が散見されており、8 月 13 日発表の九州
北部地方の

1か月予報(8/15～9/14)では、今後1か月程度も、気温の高い状態が続き、今後 2 週間
は降水量の少ない

状態が続く見込みとされており、多発生条件となっている。

・出穂後の除草は、水田内に斑点米カメムシ類を誘い込んで被害を助長するため、**出穂 10
日前までに畦畔除草**を行い、山麓部や河川敷付近など例年発生の多い圃場では、**乳熟期
(穂揃い期の約 10 日後)を中心に薬剤防除を徹底**する。

・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表 2. 各品種別の草刈り時期と防除時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂 10 日前
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17 頃まで
さがびより	8/30	～8/20 頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31 頃まで

注 1) 出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

注 2) 注 2) 夢しずくは、例年 8/16 頃出穂期を迎えるため既に草刈りの時期を過ぎています。



乳熟期の穂につく
クモヘリカメムシ
(8 月 20 日)

◆農業技術防除センター病害虫発生予察注意報第 4 号 7 月 29 日（抜粋）

1. 注意報の内容

発生地域：早植え及び普通期水稻栽培地域

発生量：平年より多い



(左：イネカメムシ、右：クモヘリカメムシ)

1) イネ科雑草地での発生状況

7 月 15～21 日に行ったイネ科雑草におけるすくい取り調査(18 地点)では、クモヘリカメムシの成虫・幼虫ともに平年より多く、ホソハリカメムシの成虫は平年よりやや多く、幼虫は平年より多かった(表 1)。これらは斑点米を生じやすい種であり、幼虫の発生も多いことから、今後も発生が多く推移すると考えられる。

表 1 イネ科雑草における斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果(7 月後半調査)

	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		アサシロカメムシ		シロホシカメムシ類		ミナミアカメムシ	イネカメムシ	
	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫	幼虫
本年(R8)	15.2	11.0	2.6	1.4	0.3	0.1	8.8	6.7	0.06	0.3	0
平年比	多	多	やや多	多	並	やや少	やや少	並	並	多	並
平年	2.9	3.0	1.9	0.5	0.2	0.5	13.3	7.6	0.03	0.02	0
前年(R7)	1.7	0.6	4.1	0.1	0.1	0.6	14.2	8.6	0.2	0.2	0

注) 表中の数値は、すくい取り調査(捕虫網 20 回振り)における地点当たりの平均捕獲虫数。

平年値は過去 10 年(H28～R7)の平均値。

【イネカメムシ】

- ・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種で、昨年から県内で確認されている。
- ・本種は、水稻の出穂始めに籾を吸汁して不稔にし、大きな減収被害が生じる。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となる。



イネカメムシの成虫（左）及び幼虫（右）

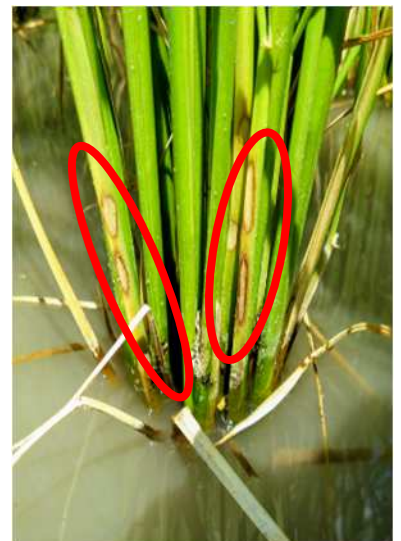
（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。

【紋枯病】

- ・病害虫発生予察注意報（7月29日付け）では普通期水稻では、やや多となっている。
- ・本年度は各品種で茎数が多く推移しており、葉身がうっぺいした圃場で、高温・多湿条件となれば多発生しやすい
- ・高温多湿条件が続くと、紋枯れ病が進展する恐れが高まるので、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。

（液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする）病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。



ひなたまる (R6 年 8月)

昨年度から作付けを開始している「ひなたまる」は紋枯病に弱く、過去には紋枯病多発で倒伏した事例もあるため、基幹防除を徹底する。

○乾田直播き情報

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」では間もなく出穂期を迎え、最も水が必要な時期を迎える。湛水が難しい圃場では、水を切らさないように注意する。

なお、まもなく除草剤の使用時期の晩限を迎えるため、使用する際はラベルをよく確認する。



5月19日播種ひなたまる
(8月19日)

4.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・7月上中旬に播種された圃場では、間もなく開花期を迎える。
- ・7月下旬に播種された圃場は、出芽後でも高温乾燥により生育が停滞している圃場がみられる。



7/14 播種 生育状況 (8/20 撮影)

2 今後の管理

1) 中耕・培土の実施

- ・7月下旬播種：現在、2回目の培土の時期を迎える。本葉が5枚開いているのを確認したら初生葉（子葉の上の葉）が隠れる程度まで培土を行う。

※ただし、本年は梅雨明け以降、降雨がほとんど無く土壌は過乾燥となっている。

極端な乾燥条件での中耕・培土は避け、雑草防除が必要な場合のみごく浅く中耕を行う。

2) 干ばつ対策について（降雨が見込めない状況の場合）

○高温乾燥が予測される場合の対策

- ・コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。

◆大豆生育期間中に必要な水量



【高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点】

1. 開花期近くの培土・・・×

うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。

2. 日中、高温時の作業・・・×

断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。

3. 株元まで土がかかっていない・・・×

培土の目的である不定根の発生、根粒菌の活性化、倒伏軽減が不十分。

3) 畝間灌水

今後も降水量が少ない状態が続く予報となっている。圃場がひび割れ白乾した状態になる前に努めて灌水を行う（過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入るため、畝間灌水しても圃場の先端まで通水せず地下に浸透してしまう）。

灌水方法としては、畝間灌水や額縁明渠を利用した灌水などを行う。その際、灌水後に圃場で滞水すると、根が退化し、大豆の生育が抑制されるため速やかに排水させることがポイントとなる。

※畝間灌水後は雑草の発生が多くなるため、除草剤散布等の雑草対策を行う。

3 病虫害対策について（発生及び防除）

① 【ハスモンヨトウ】→白変葉が発生

- ・管内でもハスモンヨトウの発生が確認されており、一部の圃場では卵が孵化し、食害が始まっている。
- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・播種期が早い圃場では、例年8月中旬頃からハスモンヨトウの幼虫が散見され始める。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下する。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。



ハスモンヨトウの白変葉
(8月20日)



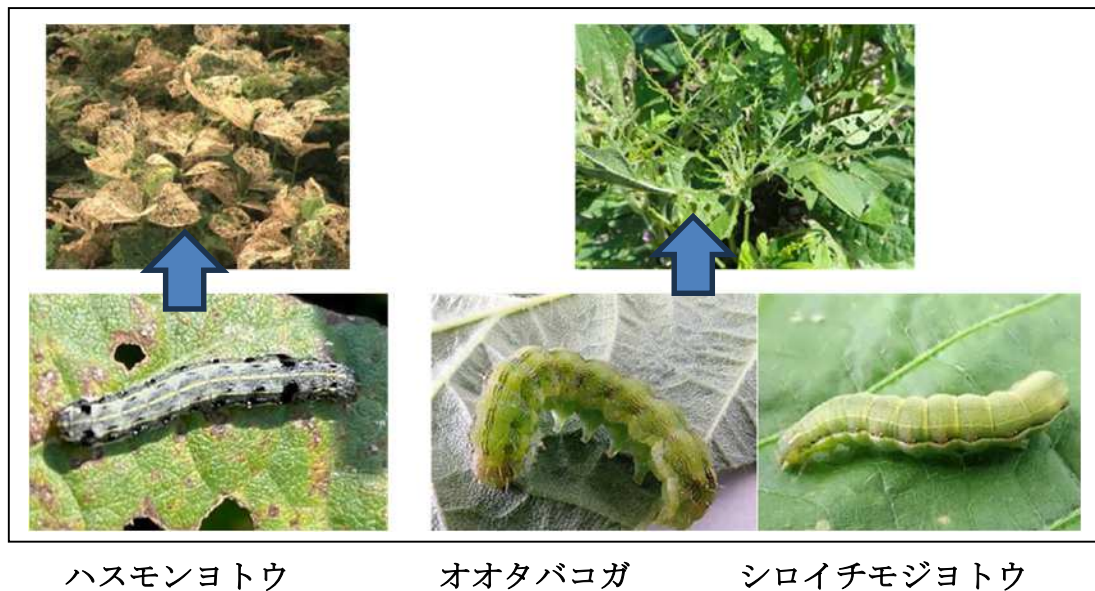
ハスモンヨトウの多発圃場
(8月19日)

② 【オオタバコガ・ウワバ類】→ 葉っぱに穴が開く

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボンに感受性が低下しており、使用を避ける。

表4. 防除薬剤（効果が高い薬剤）

	ハスモンヨトウ	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ
薬剤名	プロフレア, グレーシア, プレオ, ディアナ等	プロフレア, グレーシア, プレオ, 等



5) 雑草防除

(1) 難防除雑草への対応

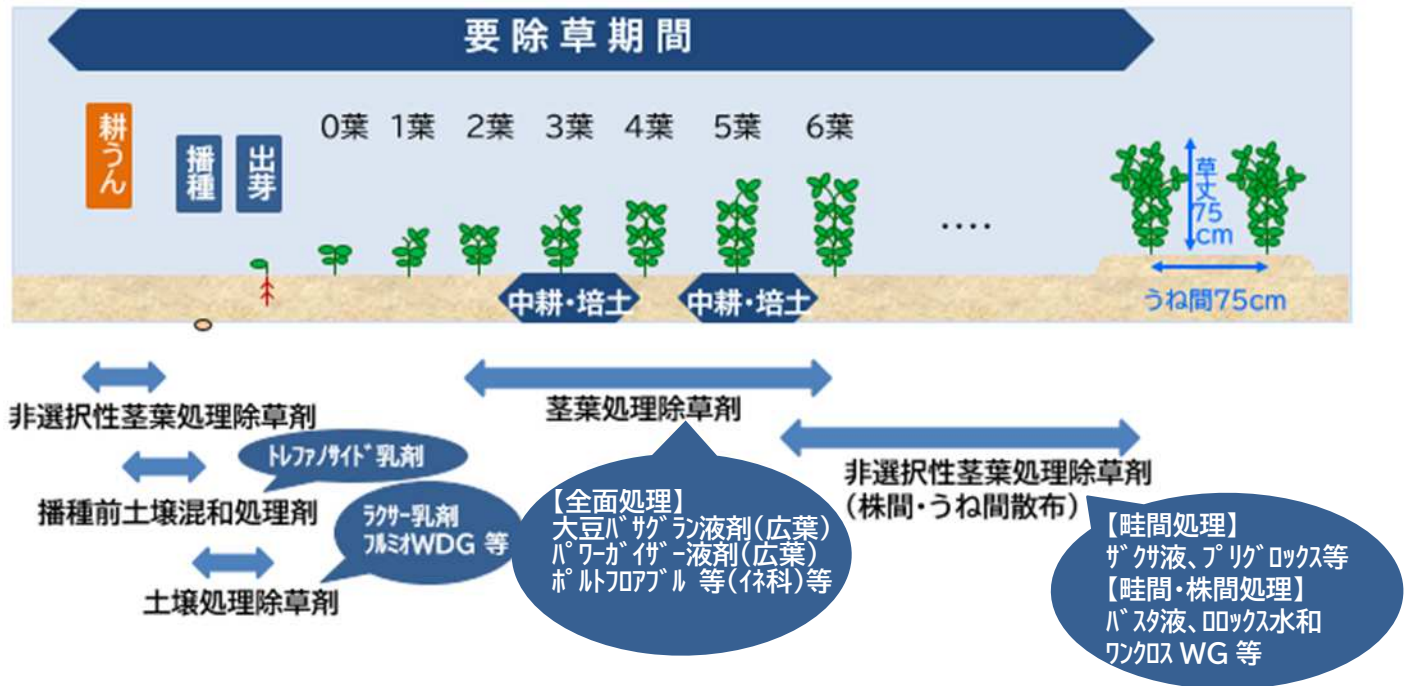
アサガオ類やホオズキ類が圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

	播種前	播種直後	2葉期 ～開花期	生育期
基本体系		ラクサー 等		
播種前に雑草が多い場合	ラウンドアップ マックスロード、 プリグロックスL 等			
ホオズキ類 多発圃場	※	ラクサー、 フルミオWDG		ラウンドアップマックスロード、バスタ、プリグロックスL（うね間処理、バスタは株間処理も登録）
アサガオ類 多発圃場	※	フルミオWDG +ラクサー	大豆バサグラン	
ツユクサ類 多発圃場	プリグロックスL 等	（慣行剤）		プリグロックスL （うね間処理）

※ 必要に応じて散布

■ 除草技術と実施時期の目安



令和8年8月20日

佐城地域農業指導者連絡協議会

令和8年産水稻・大豆生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

